

## 2006年の大雨

7月15日から24日にかけて、本州から九州にかけての広い範囲で豪雨

### 1. 概要

平成18年の梅雨入りは九州南部と東北南部を除いて平年より遅く、梅雨明けは南西諸島を除いて遅かった。

梅雨前線は、6月前半は南西諸島から日本の南海上に位置することが多く、活動が活発だったが、下旬には西日本に停滞することが多くなった。7月に入ると、梅雨前線は本州上に停滞することが多かった。

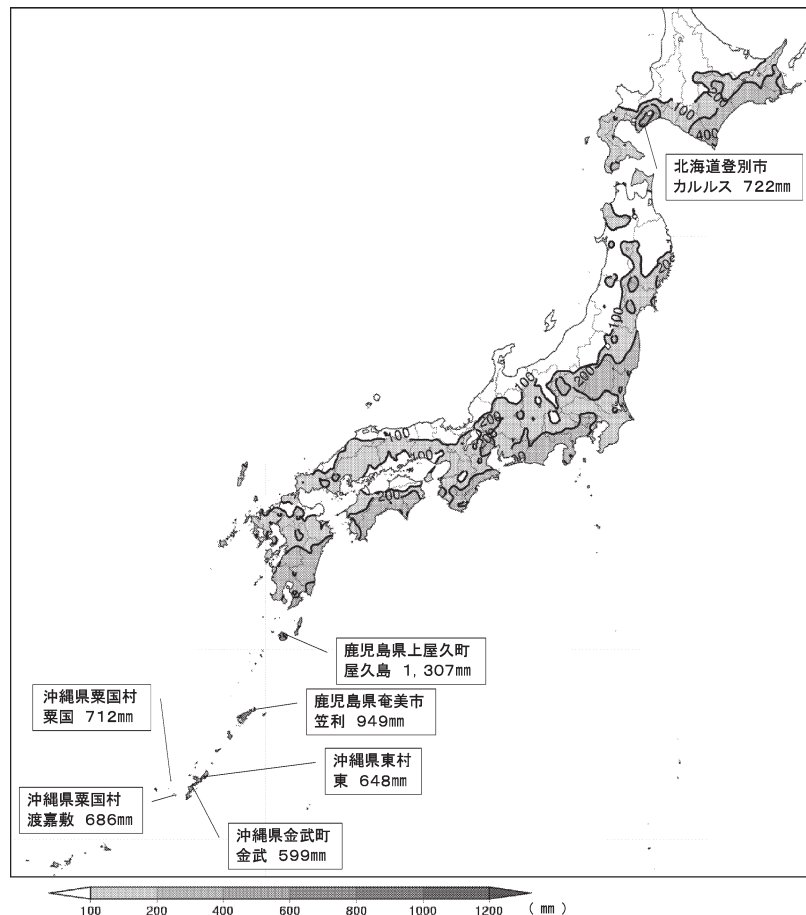
特に、7月15日から24日にかけては活動が非常に活発となり、九州から本州にかけての広い範囲で豪雨となり、甚大な被害が発生した。気象庁は、7月15日から24日に発生した豪雨について、「平成18年7月豪雨」と命名した。

梅雨時期の降水量は、東北北部を除いて平年よりも多かった。5月下旬から6月中旬にかけては、活動が活発な梅雨前線の影響を受けた南西諸島で降水量が多くなり、奄美地方では梅雨時期の降水量がかなり多くなった。また、7月は本州付近で前線の活動が活発となったために、西日本から東日本、東西南部で降水量が平年よりかなり多くなった地域があり、平成18年7月豪雨が発生し、記録的な大雨となったところがあった。一方、東北北部では、6月から7月の降水量が平年の8割程度となった。

### 2. 主な大雨

ここでは、人的被害や社会活動に影響をもたらした大雨について、気象と災害の状況をまとめた。ただし、台風によるものは、別途、「台風」で記載した部分を参照のこと。なお、負傷者などの数には風などを原因とするものも含まれる。

- (1) 4月10日～12日：西日本から東日本<低気圧>  
4月10日から12日にかけて、日本海に進んだ低気圧



第1図 総雨量分布図 (期間：5月23日～6月18日)。

の前面に暖かく湿った気流が流れ込み、九州北部や四国地方、近畿地方、東海地方、千葉県で大雨となり、降り始めからの総雨量が九州地方と四国地方で300 mm を超え、高知県佐川町で358 mm、長崎県長崎市長浦岳で332 mm、徳島県海陽町穴喰で327 mm、佐賀県太良町多良岳で322 mm となった。

このため、浸水害や土砂災害などが発生し、千葉県で床上浸水21棟、床下浸水112棟、崖崩れ10箇所、徳島県で床下浸水41棟などの被害が発生した。

### (2) 5月23日～6月18日：全国＜梅雨前線＞

5月23日から6月18日にかけて、梅雨前線が沖縄近海に停滞し、前線の活動が活発となり、沖縄本島地方や九州南部地方では、断続的に日雨量が100 mm を超える大雨となった。この期間の総雨量は、沖縄本島地方を中心に梅雨の期間に相当する5月から6月までの2か月の月間平均雨量を超えた。第1図に総雨量分布図を示す。

6月14日から18日にかけて、前線を伴った低気圧が東シナ海から日本海に進み、前線が本州南岸まで北上し、低気圧や前線に向かって暖かく湿った空気が流れ込み、前線活動が活発となった。6月17日に鹿児島県十島村中之島で04時40分までの1時間に60 mm、18日には沖縄県東村東で15時50分までの1時間に80 mm、北海道浜中町茶内原野で21時30分までの1時間に58 mm の非常に激しい雨が降り、沖縄地方から北海道にかけて日雨量が100 mm を超える大雨となった。

特に、沖縄本島では、長雨や大雨により、崖崩れや道路の陥没、住家の浸水などの被害が発生した。

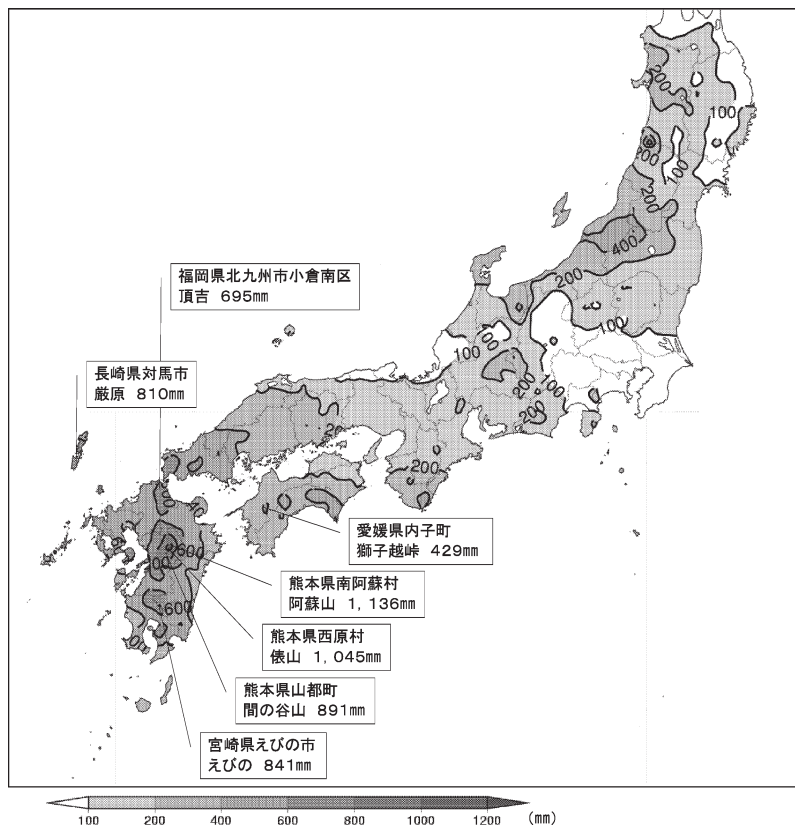
### (3) 6月22日～7月13日：九州から東北地方＜梅雨前線、台風第3号＞

6月22日から7月13日にかけて、梅雨前線が九州地方から本州南岸に停滞し、前線の活動が活発となり、西日本を中心に大雨となった。第2図に総雨量分布図を示す。

6月21日から6月29日にかけて、西日本を中心に日雨量が100 mm を超える大雨となり、24日に鹿児島県蒲生町矢止岳で204 mm、26日に熊本県山都町間の谷山で221 mm となるなど、九州地方では日雨量が200 mm を超えた。

6月30日から7月7日にかけて、前線や低気圧の影響を受け、西日本から東日本で日雨量が100 mm を超える大雨となり、7月3日に秋田県秋田市仁別で216 mm、5日に鹿児島県曾於市大隅で288 mm となるなど、九州地方や東北地方では日雨量が200 mm を超えた。

7月8日から7月11日にかけて、台風第3号の影響も加わり、西日本から東日本にかけて日雨量が100



第2図 総雨量分布図（期間：6月22日～7月13日）。

mm を超える大雨となり、8日に長崎県壱岐市芦辺で261 mm、9日に沖縄県久米島町北原で209 mm、10日に長崎県対馬市美津島で208 mm となり、沖縄地方と九州地方で日雨量が200 mm を超えた。

7月12日から14日にかけて、前線が東北地方に停滞し、東日本から東北地方を中心に日雨量が100 mm を超える大雨となり、13日に山形県遊佐町鳥海山で222 mm となった。

このため、西日本を中心に土砂災害や浸水害などが発生し、6月26日には熊本県山都町で崖崩れにより死者1名となった。

#### (4) 7月15日～24日：西日本、北陸地方、甲信地方<梅雨前線>

7月15日から24日にかけて、梅雨前線が九州地方から東日本に停滞し、前線に向かって多量の水蒸気が流れ込み、前線の活動が活発となった。九州地方、山陰地方、近畿地方、北陸地方と長野県などの広い範囲で7月の月間平均雨量の2倍を超える記録的な大雨となった。（参照：トピックス 平成18年7月豪雨）

#### (5) 8月22日～24日：九州から東北地方<大気不安定>

8月22日から24日にかけて、日本海には暖かく湿った空気が流れ込み、また、上空には寒気が流れ込んだため、大気の状態が不安定となり、九州地方から東北地方にかけて、雷を伴い短時間に激しい雨が降った所があった。1時間雨量が、22日に大阪市豊中市豊中で

110 mm、高知県梶原町梶原で78 mm、栃木県佐野市葛生で65 mm、新潟県糸魚川市糸魚川で64 mm、23日に岩手県八幡平市岩手松尾で50 mm など、非常に激しい雨となった。

このため、短時間の大雨による家屋の浸水、降ひょうによる農作物の被害、落雷による停電などが発生した。近畿地方では、大阪府豊中市や兵庫県尼崎市、伊丹市などで床上浸水が143棟、床下浸水が551棟の浸水害が発生した。

#### (6) 10月4日～9日：関東甲信地方、北日本<前線、台風第16号、低気圧>

10月4日から5日にかけて、台風第16号の北上に伴って、本州南岸に停滞した前線に向かって台風周辺の暖かく湿った空気が流れ込み、前線の活動が活発となった。また、前線上に発生した低気圧が6日から8日にかけて本州南岸を北東に進み、7日朝にかけて急速に発達しながら関東の東海上に進んだ。その後、三陸沖に進み、8日には北海道の東方海上に進んだ。

このため、関東地方から北海道地方にかけての太平洋側で平均風速25 m/s を超える暴風となり、また、海上では波の高さ9 m を超える猛烈なしけ、沿岸では高潮となった。

また、関東地方、東北地方の太平洋側、及び北海道のオホーツク海側で降り始めからの総雨量が250 mm を超える大雨となり、北海道網走支庁では総雨量が10月の月間平均雨量の4倍を超える大雨となった。

## 2006年の台風

台風の発生数は少なく、接近数は平年並

### 1. 概要

平成18年に発生した台風は23個（平年26.7個）と平年に比べ少なかった。

日本に上陸した台風は、台風第10号、台風第13号の2個（平年2.6個）と平年並だった。接近数も10個（平年10.8個）と平年並で、日本本土への接近数は3個（平年5.2個）、南西諸島は6個（平年7.2個）となった。第1表に台風の発生数、上陸数、接近数を、第2表に発生した台風の一覧を示す。

平成18年の台風は、発生数が平年に比べて少なかったことや、中国大陸や南シナ海へ進んだ台風が多く本土（本州、北海道、九州、四国）に接近した台風が少なかったことが特徴である。日本に上陸した2つの台風のうち台風第13号は、上陸した九州を中心に大きな被害をもたらした。

### 2. 日本に影響を及ぼした主な台風

日本に影響した主な台風（本稿では台風の中心が日本から概ね500 km に入った場合とする）のうち、主な台風について以下に概要を示す。なお、風速や降水量などの観測値を記載する際の観測地点名は、気象台や候候所などのときはその官署名を、アメダス地点の

場合は都道府県名、市町村名及び地点名（地点名が市町村名と同じ場合は省略）を示した。被害状況については、主に気象庁が取りまとめた資料によるが、一部、総務省消防庁等発表の資料も使用した。第3表に日本に影響した台風の一覧、第1図にその経路図を示す。

#### (1) 台風第1号 (CHANCHU)

5月8日15時にカロリン諸島の西海上で発生した熱帯低気圧は西へ進み、9日21時にミンダナオ島の東海上で台風第1号となった。台風は発達しながら西北西に進み、11日夜から13日にかけてフィリピンを通過し、南シナ海を西へ進んだ。台風は東シナ海で進路を急激に北へ変えた直後の15日09時に勢力が最大となった。台風は進路を次第に北北東に変え、中国大陸の海岸沿いに進んだ。台風は19日09時に東シナ海で温帯低気圧に変わった後、東シナ海を東へ進み、20日03時に九州の西海岸で消滅した。

#### (2) 台風第3号 (EWINIAR)

6月29日15時にカロリン諸島近海で発生した熱帯低気圧は北西へ進み、7月1日03時に台風第3号となっ

第1表 2006年の台風発生数、日本への上陸数、日本への接近数。

項目	月	月												年間
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
平 年	発生数	0.5	0.1	0.4	0.8	1.0	1.7	4.1	5.5	5.1	3.9	2.5	1.3	26.7
	上陸数						0.2	0.5	0.9	0.9	0.1	0.0		2.6
	接近数				0.1	0.5	0.7	2.1	3.4	2.6	1.3	0.7	0.1	10.8
平成17年 (2005年)	発生数	1		1	1	1		5	5	5	2	2		23
	上陸数							1	1	1				3
	接近数				1		1	2	3	4	2			12
平成18年 (2006年)	発生数					1	1	3	7	3	4	2	2	23
	上陸数								1	1				2
	接近数							3	4	2	1			10

(注) ・平年値は、昭和46年（1971年）～平成12年（2000年）の30年平均。

- ・日本への接近は2か月にもたがることがあり、各月の接近数の合計と年間の接近数とは必ずしも一致しない。
- ・上陸：台風の中心が北海道、本州、四国、九州の海岸線に達した場合を「上陸」という。小さい島や半島を横切って短時間で再び海に出る場合は「通過」とする。
- ・接近：台風の中心が、日本の海岸線から300 km 以内に入った場合を「接近」という。

第2表 2006年に発生した台風の一覧表。

台風番号	台風名	熱帯低気圧の発生			台風の発生			台風期間中の最低(大)値			熱帯低気圧または温帯低気圧となった日時と位置		消滅前の最後に確認された日時と位置、又は域外で最初に確認された日時							
		月日時	北緯	東経	月日時	北緯	東経	月日時	hPa	風速	m/s	月日時	北緯	東経	種類	月日時	北緯	東経		
1	CHANCHU	5 8 15	8.7	135.3	5 9 21	8.6	132.0	5 16 09	930	5 16 09	50	5 15 15	520	5 19 09	31.6	124.9	L	5 19 21	32.8	128.7
2	JELAWAT	6 24 15	10.8	127.3	6 27 21	18.1	113.6	6 29 03	996	6 28 21	20	6 29 03	E: 130 W: 70	6 29 09	21.1	110.7	TD	6 29 09	21.1	110.7
3	EWINIAR	6 29 15	6.0	139.8	7 1 03	7.5	137.8	7 5 09	930	7 5 09	50	7 9 00	E: 440 W: 310	7 10 21	37.5	128.5	L	7 13 03	48.2	140.9
4	BILIS	7 8 15	11.6	140.5	7 9 15	13.4	137.0	7 13 18	970	7 14 18	30	7 13 09	E: 700 W: 560	7 15 15	26.7	114.9	TD	7 17 03	28.8	112.1
5	KAEMI	7 18 03	8.9	147.8	7 19 21	12.0	140.0	7 23 15	960	7 23 15	40	7 23 15	S: 350 N: 240	7 26 09	24.8	116.0	TD	7 27 09	25.0	113.2
6	PRAPIROON	7 28 15	13.4	129.5	8 1 15	17.0	117.7	8 3 15	970	8 3 15	35	8 2 21	E: 370 W: 330	8 5 09	24.0	107.0	TD	8 5 15	23.9	106.6
7	MARIA	8 4 03	21.2	152.2	8 6 03	26.4	143.8	8 8 06	975	8 8 06	35	8 8 06	E: 260 W: 130	8 10 15	36.9	144.4	L	8 14 21	48.5	150.5
8	SAOMAI	8 5 09	10.0	148.5	8 5 21	11.7	146.5	8 10 03	925	8 10 06	55	8 10 03	E: 300 W: 190	8 11 09	28.2	117.3	TD	8 12 03	30.0	113.1
9	BOPHA	8 5 15	20.5	132.8	8 6 21	22.4	130.4	8 8 12	980	8 8 12	30	8 8 18	N: 190 S: 130	8 9 15	22.3	118.6	TD	8 11 09	22.1	113.9
10	WUKONG	8 12 15	20.7	141.2	8 13 09	24.4	138.5	8 18 06	980	8 18 00	25	8 18 18	330	8 19 21	36.3	130.0	TD	8 21 15	41.8	133.4
11	SONAMU	8 13 09	17.0	125.9	8 14 09	18.1	130.4	8 15 09	992	8 15 09	20	8 15 09	SE: 200 NW: 130	8 15 15	22.3	137.2	TD	8 16 09	30.2	140.2
12	IOKE				8 27 21	17.2	179.5	8 31 15	920	8 31 15	55	9 6 21	SE: 560 NW: 460	9 7 03	51.9	166.2	L	9 7 21		域外
13	SHANSHAN	9 9 09	13.3	138.7	9 10 21	16.8	134.8	9 16 06	919	9 16 18	55	9 17 00	410	9 18 21	40.1	134.6	L	9 20 03	44.2	140.2
14	YAGI	9 16 21	19.8	156.3	9 17 15	20.6	157.5	9 22 03	910	9 22 03	55	9 25 09	SE: 430 NW: 370	9 25 15	42.0	163.9	L	9 27 15		域外
15	XANGSANE	9 25 09	11.8	129.1	9 26 09	11.9	127.6	9 30 15	950	9 30 15	40	9 30 09	330	10 2 09	15.7	104.4	TD	10 2 21	15.8	103.8
16	BEBINCA	9 28 21	12.9	143.5	10 3 09	15.4	131.2	10 6 09	980	10 5 21	25	10 5 15	NE: 600 SW: 560	10 6 15	29.7	140.4	TD	10 6 15	29.7	140.4
17	RUMBIA	10 2 21	17.7	151.0	10 3 15	20.1	154.1	10 5 21	985	10 5 21	25	10 5 09	NE: 600 SW: 460	10 6 09	26.7	151.8	TD	10 6 15	30.0	151.0
18	SOULIK	10 8 21	13.3	160.0	10 9 21	16.1	155.3	10 14 18	955	10 15 06	40	10 14 18	440	10 16 21	37.6	157.0	L	10 17 15	38.0	171.5
19	CIMARON	10 25 15	12.3	141.6	10 27 15	13.0	131.0	10 29 21	920	10 29 21	50	11 2 03	N: 330 S: 280	11 4 21	16.1	115.7	TD	11 7 03	12.5	111.4
20	CHEBI	11 8 15	15.6	136.9	11 9 21	15.9	130.1	11 10 21	925	11 10 21	50	11 11 03	N: 280 S: 240	11 13 21	16.3	112.3	TD	11 15 03	16.7	110.4
21	DURIAN	11 25 15	9.6	147.2	11 26 21	10.0	141.4	11 29 21	915	11 29 21	55	11 29 15	NE: 410 SW: 310	12 5 15	9.1	105.6	TD	12 6 09		域外
22	UTOR	12 7 09	9.1	136.6	12 8 03	10.3	133.1	12 13 03	945	12 13 03	45	12 12 21	N: 370 S: 300	12 14 15	18.0	113.0	TD	12 15 15	17.0	113.0
23	TRAMI	12 15 15	7.7	156.9	12 17 21	13.4	138.4	12 18 21	1000	12 18 21	20	12 18 21	190	12 19 03	14.3	131.8	TD	12 20 15	12.8	123.9

表中の日はすべて日本時 (JST)。

「台風期間中の最低(大)値」の起時は、最低(大)となった最後の時刻である。

(但し、風速はノットで解析し、5 m/s 単位に換算しているため必ずしもこれに当てはまらない事がある。)

強風域とは、台風の周辺で平均風速がおおむね15 m/s 以上の領域。

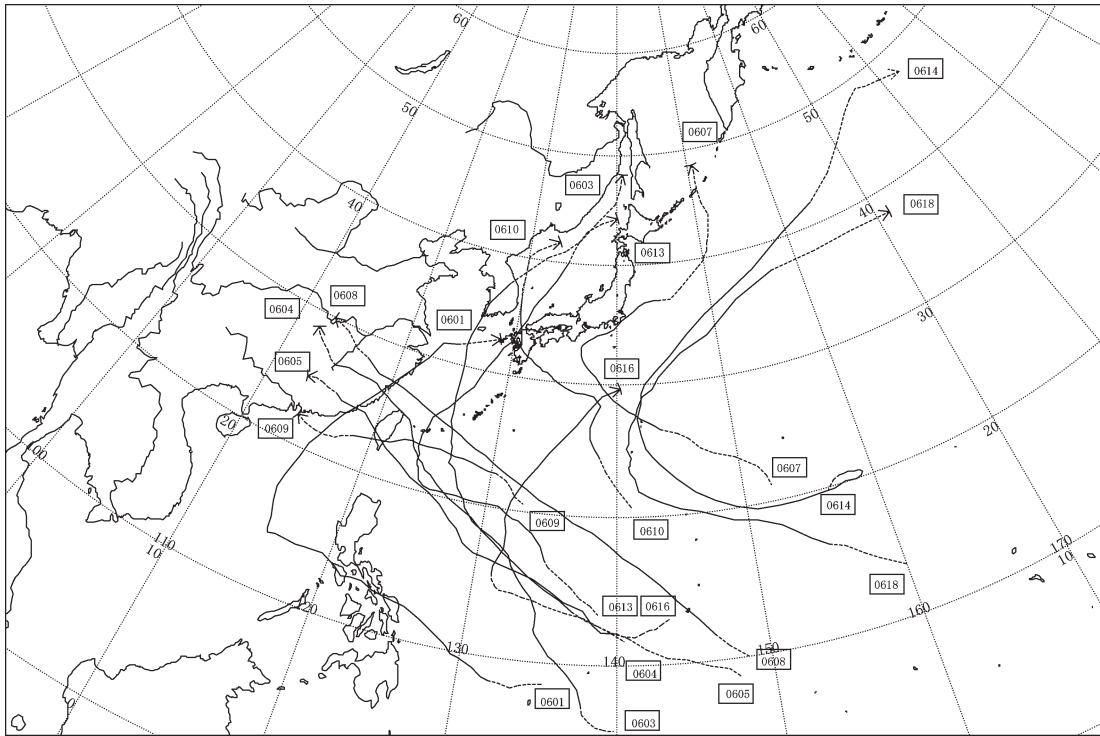
種類欄の「TD」は熱帯低気圧、「L」は温帯低気圧を表す。

域外とは、日付変更線(東経180°)より東側、又は東経100°より西側の領域。

第3表 2006年に日本に影響した台風の概要表。

台風番号	日本への影響 (台風の中心が日本から概ね500 km に入った場合)				日本への接近 (台風の中心が日本の海岸線から300 km 以内に入った場合)			
	月日		地域		月日		地域	
	始	終			始	終		
1	5/17	5/18	沖縄地方		7/8	7/10	沖縄地方, 九州地方	上陸または通過せず
3	7/7	7/10	沖縄地方, 西日本		7/12	7/14	沖縄地方	上陸または通過せず
4	7/12	7/14	沖縄地方		7/24	7/25	沖縄地方	上陸または通過せず
5	7/24	7/25	沖縄地方		8/6	8/10	小笠原諸島, 四国地方, 近畿地方, 東日本, 東北地方	8月9日7時半頃, 新島付近を通過
7	8/6	8/10	小笠原諸島, 西日本, 東日本, 東北地方		8/9	8/10	沖縄地方	上陸または通過せず
8	8/8	8/10	南西諸島		8/7	8/9	沖縄地方	上陸または通過せず
9	8/6	8/9	沖縄地方		8/16	8/19	九州地方, 四国地方, 中国地方	8月18日1時過ぎ, 宮崎県宮崎市付近に上陸
10	8/13	8/19	小笠原諸島, 伊豆諸島, 西日本		9/15	9/18	沖縄地方, 西日本	9月16日5時半頃, 西表島付近を通過し, 9月17日18時過ぎ, 長崎県佐世保市付近に上陸した。
13	9/14	9/18	沖縄地方, 西日本, 東日本, 東北地方		9/22	9/23	小笠原諸島	上陸または通過せず
14	9/22	9/24	小笠原諸島, 伊豆諸島		10/14	10/15	小笠原諸島	上陸または通過せず
16	10/4	10/6	沖縄地方, 小笠原諸島, 伊豆諸島					
18	10/12	10/15	小笠原諸島, 伊豆諸島					

\* 台風の中心が日本の海岸線から300 km 以内に入った場合を「日本に接近した台風」という。ただし, 現在は気象官署からの距離で計算している。  
\* 台風の中心が日本から概ね500 km に入った場合を本稿では「日本に影響した台風」とした。



第1図 2006年に日本に影響を及ぼした台風の経路図。

た。台風は進路を北西に保ったまま4日21時にフィリピンの東海上で勢力が最大となった。台風は次第に進路を北に変え、8日には南西諸島に接近した。台風は東シナ海を北上し、朝鮮半島に上陸して北東へ進んだ。台風は10日21時に朝鮮半島で温带低気圧に変わり、進路を北東に保ったまま日本海を進んで13日09時に日本海で消滅した。

7月8日から11日にかけて、梅雨前線は本州付近に停滞し、台風第3号の影響も加わり、西日本から東日本にかけて日雨量が100 mmを超える大雨となった。日雨量は、8日に長崎県壱岐市芦辺で261 mm、9日に沖縄県久米島町北原で209 mm、10日に長崎県対馬市美津島で208 mmとなり、沖縄地方と九州地方で200 mmを超えた。

また、沖縄本島地方や先島諸島では台風第3号の接近に伴い、8日から10日にかけて、沖縄地方と九州地方では平均風速20 m/sを超える暴風となった。

### (3) 台風第4号 (BILIS)

7月8日15時にヤップ島の北東海上で発生した熱帯低気圧は西北西へ進み、9日15時に同じ海域で台風第

4号となった。台風はさらに西北西に進み、13日15時に与那国島の南海上で勢力が最大となった。台風は台湾北部を通過した後、14日に華南に上陸した。台風は進路を北西に保ちつつ、15日15時に中国大陸で熱帯低気圧に変わり、17日09時に消滅した。

### (4) 台風第5号 (KAEMI)

7月18日03時にトラック諸島の西海上で発生した熱帯低気圧は西北西に進み、19日21時にフィリピンの東海上で台風第5号となった。台風は進路を西北西に保ったまま発達し、21日21時に同じ海域で勢力が最大となった。台風は22日に進路を北西に変え、24日には台湾に上陸した。台風は25日に華南に再上陸した後、西へ進んで26日09時に華南で熱帯低気圧に変わり、27日15時に消滅した。

### (5) 台風第7号 (MARIA)

8月6日03時に父島の東海上で発生した台風第7号は、8日に紀伊半島の南海上で進路を変え、本州南岸を東北東へ進み、9日07時半頃、新島付近を通過し房総半島の沿岸付近を北東に進んだ。

台風の接近に伴い、8日に入ってから台風の北東側にある発達した雨雲により断続的に雨が降り出し、その後同日昼過ぎから9日夕方にかけて伊豆諸島や東海地方の沿岸を中心に1時間に50mm以上の非常に激しい雨となった。日雨量は、東京都三宅村三宅島で325mm、静岡県南伊豆町石廊崎で267mmとなり、観測開始以来の第1位となった。最大風速は、東京都三宅村三宅島坪田で9日に南南西の風22m/sとなるなど、伊豆諸島や関東南部で非常に強い風となった。東海道沖の海上では台風の接近・通過に伴って波やうねりが高くなり、6メートルを超える大しけの状態となった。

このため、神奈川県、千葉県、静岡県と伊豆諸島では、住家の浸水や崖崩れ、また、舞鶴市では高潮による浸水害が発生した。

#### (6) 台風第8号 (SAOMAI)

8月5日09時にグアム島の南東海上で発生した熱帯低気圧は西北西に進み、同日21時に同海域で台風第8号となった。台風は進路を西北西に保ち、9日には宮古島の東海上を通過して東シナ海に進み、21時に宮古島の北海上で勢力が最大となった。台風は10日、華中に上陸し、西北西に進んで11日09時に同地域で熱帯低気圧にかわり、12日09時に消滅した。

#### (7) 台風第9号 (BOPHA)

8月5日15時に南大東島の南海上で発生した熱帯低気圧は北西へ進み、6日21時に同海域で台風第9号となった。台風は西へ進んで先島諸島に接近し、8日09時に勢力が最大となった。台風は9日、台湾に上陸して台湾南部を横断し、同日15時には南シナ海で熱帯低気圧に変わった後、さらに西へ進んで11日15時に華南の沿岸で消滅した。

#### (8) 台風第10号 (WUKONG)

8月12日15時に父島の南海上で発生した熱帯低気圧は北北西へ進み、13日09時に父島の南西海上で台風第10号となった。台風は北北東へ進んだ後、15日03時に父島の西海上で勢力が最大となり、その後、西北西に向きを変えた。台風は北西に向きを変え、18日01時過ぎに宮崎市付近に上陸した。台風は北へ向きを変えて九州を通過し、日本海へ抜けた。台風は19日21時に日本海で熱帯低気圧に変わり、21日21時に消滅した。

また、前線が日本海から北海道にかけて停滞し、台

風第10号の北上により、前線に向かって南から暖かく湿った空気が流れ込み前線の活動が活発となった。

台風や前線の影響により、九州地方、四国地方、北海道地方で降り始めからの総雨量が400mmを超え、18日に台風が上陸した九州では、日雨量が宮崎県えびの市えびので463mm、長崎県雲仙市雲仙岳456mmなど、また、18日に前線が北海道を南下したため、北海道平取町仁世字で361mmなどとなった。最大風速は、宮崎県宮崎市赤江で17日に北の風22m/s、愛媛県伊方町瀬戸で19日に南南東の風21m/sとなるなど、九州地方、四国地方で非常に強い風となった。

このため、九州地方、四国地方、東北地方、北海道地方では、土砂災害や農業・林業被害等が、また、舞鶴市では高潮による浸水害が発生した。

#### (9) 台風第13号 (SHANSHAN)

9月9日09時にヤップ島の北海上で発生した熱帯低気圧は北西へ進み、10日21時にフィリピンの東海上で台風第13号となった。台風は発達しながらさらに北西へ進んだ後、沖縄の南海上を西へ進んだ。台風は進路を北に変え、16日00時には勢力が最大となり、同日05時半頃、西表島を通過した。台風は東シナ海を北東へ進み、17日18時過ぎ、長崎県佐世保市付近に上陸した。台風は進路を北東に保ったまま日本海へ抜け、18日21時に温帯低気圧に変わった後、東北東へ進んで20日09時に北海道の西海上で消滅した。

この台風は、強い勢力を保ったまま、沖縄地方を通過し、九州地方に接近・上陸したため、沖縄地方から九州地方にかけて暴風となり、最大瞬間風速が16日に沖縄県竹富町西表島で北東の風69.9m/s、最大風速が17日に長崎県長崎市野母崎で南東の風46m/sとなるなど観測史上最大となった。17日には、台風の接近に伴う発達した積乱雲が通過し、昼過ぎに宮崎県延岡市、日向市、日南市で竜巻が発生した。

また、台風と本州付近に停滞した活発な前線の活動により、九州地方を中心に大雨となった。

#### (10) 台風第14号 (YAGI)

9月16日21時に南鳥島の南東海上で発生した熱帯低気圧は東へ進み、17日15時に同海域で台風第14号となった。台風は進路を東から西へ変え、21日21時には父島の南東海上で進路を北西に変えながら勢力が最大となり、翌日、転向しながら父島に接近した。台風は北東に進んで25日15時に日本の東海上で温帯低気圧に



変わり、進路を東南東に変えて27日09時にアリューシャン列島の南海上で経度180度を越えた。

(11) 台風第16号 (BEBINCA)

9月28日21時にグアム島の西南西の海上で発生した熱帯低気圧は西南西へ進んだ後、翌日には西北西に向きを変えた。熱帯低気圧は9月30日から10月1日にかけてフィリピンの東海上を西北西へ進み、その後、進路を北へ向きに変えて10月3日09時にフィリピンのはるか東海上で台風第16号となった。台風は北東に向きを変え、5日03時には日本の南海上で勢力が最大となった。台風は進路を北東に保ったまま、6日15時に

同海域で熱帯低気圧に変わり、6日21時に父島の北北西の海上で消滅した。

(12) 台風第18号 (SOULIK)

10月8日21時に南鳥島の南東海上で発生した熱帯低気圧は西北西へ進み、9日21時に南鳥島の南海上で台風第18号となった。台風は転向しながら14日15時に硫黄島近海で勢力が最大となった。父島に接近した後、北東へ進んで16日21時に日本のはるか東海上で温帯低気圧に変わり、17日21時にアリューシャン列島の南海上で消滅した。